
水月夜曲

エニシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水月夜曲

【Nコード】

N4656E

【作者名】

エニシ

【あらすじ】

死後の世界で出会った水の精霊の提案で、俺は異世界で精霊なんぞをやることになった。奇妙な形で繰り広げられる転生異世界召還型ファンタジー。

序章 俺が死んだ

俺は本日、二十年という短い年月をもってその幕を下ろした。

ぶっちゃけ死んだ。

弁解のしようもない。海水浴に遊びに行って、溺れ死んだ。そう、溺死。酒を飲んでハイになっていたのがいけなかったと、今になって猛省する。

「いえーい、泳いじゃうよー俺はよー」

と彼方に叫びながら沖から相当離れたうえに、地に足の付かない場所で足を吊ったのだから助かりようもない。しかも、夜だ。同じく酒を飲んで騒いでいた仲間も気付かぬうちに、俺は海の深い底に沈んだ。残された友人たちの後味の悪さを思えば、非常に悪いことをしたと思う。

まあ、だがしかし、今の俺にとってそんなことは些細なことだ。

死んだことが些細というのは些か可笑しいと思うかもしれないが、未だに意識というものを保っているがために、俺に死んだという実感はない。認識はしているがな。そのことを配慮して頂き、どうかご容赦願いたい。

上下左右の識別もできない闇の中。そんな場所に、俺は居た。ふわふわと海の中の海藻のごとく、闇の中を漂っている。自分の身体というものを、今の俺は持っていない。指を動かす意識をしても動いているかどうかわからない。手で自分の身体を触れようと思っても触れられない。だからやっぱり、今の俺には身体という事物が排

除されているのだろう。

この現状において、俺は自分が死んだということを冷静に理解していた。WHY、と聞かれても困る。多分、これは死んだ人間にしかわからない認識なのだ。生きている間は死ぬことがもちろん恐ろしかったが、死んでしまえばどうということはないな、と思う。多分、死を恐れる気持ちがあるのは、そこに自我の消滅という前提があるからだろう。そう考えると、自我の消滅を迎えていない今の俺は、まだ死んでいないと言うこともできなくはないではないか。

とはいえ、現状はまさしく文字通りに暗中模索。闇の中を漂うのはいいが、いつまで漂っていればいいのだろうと少々うんざりした心持にある。ここがどこかもわからぬままだ。

死んだということから、天国か地獄かと検討はつくが、そうなるとうとう考えても地獄にしか分類できそうにないこの空間。確かに親より先に死んだ俺は親不孝者であろうが、それまでの溢れんばかりの善行も考慮して欲しいと切実に思う。閻魔様。仏様。神様。お代官様。

鬱々としながらも、まだ幾分余裕のある状態で漂っている俺。そんなとき、どこか遠くからすすり泣きのような音が聞こえてきた。

序章 精霊との出会い

完全無視界、完全無音のこの世界で、泣き声とな。

しかも、声は可愛らしい女子の声。

ここで行かなくては男子ではないだろう。

気分は全速力、しかし、現実海面を漂う藻屑並みのスピードで声の方向へ近づいていった。待っている、どこかのハニー。

次第に大きくなる泣き声に反比例して、闇の濃さは薄らいでいく。そして声の主と思しき人がいる場所は、淡い光に包まれていた。目というものが今の俺にあるかどうかはわからんが、生きている頃の視界と現状は変わらない。ゆえに死人補正の掛からぬと思われる俺の視界に映ったのは、まさに絶世というべき美少女だった。

うお、目が痛い。だからあるかどうか知らんけど。

ベールのようなものを被り、その美しき白皙の裸体を透けるような衣装で隠すその少女。しかしそこに卑猥さはなく、むしろ神々しいものさえ感じた。食い入るように見てしまうのは、そのためだ。下心はない。

ベールから溢れ流れ出るように肩に注ぐ、黒に近い群青色の髪。涙に濡れた長い睫。そこに垣間見える湖を思わせる蒼の瞳。

上気した赤い頬。唇は淡い桃色。しな垂れたその肢体の完全なプロポーション。

惜しい。実に惜しい。生きていた頃に会いたかった。せめて身体があればと悔やまれる。

とはいえ、生きていたときにもお見えしたことがないような美少女だ。適度な可愛さならばここぞとばかりに声をかけるが、ここまでの可憐な美しさだと声をかけるのさえ躊躇われる。こんな容姿でごめんなさいと頭を下げたくなる。

が、気付いた。そうだ。今の俺には身体はない。だから声で判断されるしかないのだ。ああ、実に残念。俺のパーフェクトフェイスを見せることができないとは。

それならば、と俺は急に強気になった。

さあ、俺の美声に酔いしれろ。

「どうしたんだい？」

子猫ちゃん、とはさすがに恥ずかしくて言えない。口を塞ぐ。うむ。どもってはいないだろうか。

「……誰？」

少女はその顔を上げ、俺を探しているのだろう。闇の中で目をあちらこちらに向ける。そして、なぜか俺のほうへと視線を定めた。

え？　俺見えているの？

「あ」

少女はそう小さく声を上げ、顔を歪ませ、また泣き出した。

おい、ちょっと待て。それは何か。俺が泣かれるほどの姿をしているということか。生前だってそんな反応をされたことはなかったぞ。

「泣くな、ガキンちよ！」

頭突き、ができるかどうかはわからない。が、イメージとしてそれに近いことをやってみた。多分、体当たりみたいな形になっただろう。少女は「はうっ」と漫画のような声を上げて仰け反った。

「い、痛いじゃないですか」

「そうか。不思議だな。俺は痛くないぞ」

てっきりすり抜けるかと思ったが、限りなく予想通りに攻撃は成功した。そのとき接近した少女の顔にドキドキと胸が高鳴ってしまったのはまあ秘密にしておく。

「何で人の顔見て泣いてんだよ？」

もっと紳士的に振舞うつもりであったが、泣き出す少女に苛立ち頭突きを敢行してしまった今となっては、もう取り返しはつかないわけで。この言葉も「あん？」みたいな声色だった。他意はない。が、少女は「ひっ」と怯えたような声を上げる。

むう。何かイメージと違うな、この子も。

「か、顔を見て泣いたわけではありません。というか、顔ないじゃないですか、あなた」

「ほう。揚げ足取りかね」

やっぱ顔はないのね。

なんとなく、球状ではないかとこのとき思った。

「ち、違います。え、えっと。あなたも、命の灯火を落とされたのだと知って」

そう言うのと、少女はまた顔を歪めて俯いた。堪えたような泣き声が、あるかどうかともわからん耳に届く。

泣かせたような心持。非常に複雑である。手を差し伸べたい。が、その手がない。齒がゆい気持ちに襲われながら、声をかけることしかできない俺は、その声もかけないで、ただその少女の傍にいた。

しばらく泣き続けた少女は、ぐす、と一度鼻をすすると顔を上げた。その蒼い瞳の周りが対照的に赤く充血している。「すみません」と一言呟くと、ぎこちない笑顔を俺に向けた。

「泣きたいのは、あなたも同じですのに」

「そうか？　俺は、あまり死んだという実感はない」

「最初はそうでした、私も。でも、だんだんと、もう生きていた世界に触れることができないのだと思うと、悲しくなつて。よくわからないですけど、涙が溢れてきました」

「そういうものか」

「そういうものです」

今この少女に対してできることは、声をかけることしかない。しかし、生きている世界の人には、声をかけることさえできない。自意識過剰なわけではないが、俺が死んで泣いてくれる人はいると思う。その人たちに、何もできない。それは、確かに込み上げてくるような悲しさがある、

「あなたは、泣かないんですか？」

「泣かないね。男はそう簡単に泣かないのさ」

「意地っ張りなんですね」

そう言うと、少女は今までの作り笑いではなく、ふんわりと本物の顔で笑った。やっぱり、綺麗な女の子はそう笑うに限る。

だから、せっかくのこの雰囲気、目がないから泣けないのだという言葉で白けさせるのは何とか我慢した。

それから俺と少女は語り合った。この闇の中では他にすることもない。

もともと、俺はそのために少女に声をかけたのだ。

少女の名前はアクアと言うらしい。外国だろうとそんな名前はなかなか聞いたことがない。アニメならあるがね。不思議に思って出身を聞くと、案の定その土地も聞いたことがない名だった。

首を捻らんばかりのその疑問も、アクアの一言で氷解する。

「私は、水の精霊なんです」

そうか、電波ちゃんか。

と言うと、アクアは「電波ちゃん？」と本気で首を傾げていた。

よくわからないが、俺がその話を信じていないとわかったのだろう。それにアクアは怪訝な顔で「精霊を知らないのですか？」と、まるでそれを知らない俺が非常識人みたいに問いかけた。酷く理不尽だ。

俺と彼女にあるそんな齟齬を質疑応答の形で潰していくうちに、どうも俺とアクアは別の世界の魂らしい、ということがわかった。というか、そう無理やり結論付けた。まるでそれを信じていないアクアだが、それは俺も同じこと。しかし、アクアが居たというその

異世界話はなかなか面白かった。

魔法に剣、竜に魔物。そして精霊。小さい頃に憧れたファンタジーな世界のお話。今の歳なら鼻で笑いそうなものなのだが、アクアの話が妙に生々しかったせいかな、こんな状況のためなのか、アクアの言葉を何の偏見もなく受け入れ始めている自分に気付く。そんな世界もあるかも知れんと、思った。

次に俺の番、ということで、俺も自分の世界の話をした。

電車、バス、自動車、飛行機などの乗り物。ガスコンロも今では古いと言い切り、家庭電気機器の話しを終えて、携帯電話からパソコンへ。テレビで話をひと段落させると、アクアの、最初は訝しげな思いを乗せていたその蒼蒼の瞳も、今ではキラキラと輝いていた。ワクワク、なんて言葉がアクアの口から出そうに怖い。

「凄い世界ですね。いいなあ。私もそんな世界で生まれたかった」

「俺はお前の世界に生まれたかったがね。俺たちの世界にいる人間なら、誰だって憧れるぞ」

「そうですか？ 私たちの世界の人間は、絶対にあなたたちの世界のほうを望むと思いますよ。私も、人間としてならあなたたちの世界がいいです。とても便利ではないですか。日常の様々な雑事が、全で一瞬で終わるのですよ。しかも生きるということに、何の不安もない。素晴らしい世界ではないですか」

「むしろ、生きること何の不安もないからこそ、鬱屈が胸に宿るんじゃないか。切迫した状況だからこそ、人は生きているという実感が持てるのだと俺は思う」

「そういうものですかね？」

「そういうものじゃないか」

そう言葉を交わすうちに、アクアも俺の世界を信じ始めているこ

とがわかった。通じ合っているとわかるのは、やはり嬉しいものがある。嘘も建前もない言葉の応酬は、なかなか心地よい。それはもちろん、話し相手が可愛い女の子だからこそなのだがね。むさい男となら、一瞬で会話は終了していただろう。

「あの、提案があるのですけど」

何やら考え込んでいたような様子のアクアはそこで顔を上げ、俺に熱い視線を向けた。何だ。とうとう愛の告白か。もちろん、俺はOKだ。さあ、このどこにあるかはわからん俺の胸に飛び込んで来い。

「私たちの世界、交換しません？」

「ばっちこいだ」

意味がわからないまま、俺はそう答えた。
うむ。愛の告白ではないわけね。

序章 俺と精霊を繋ぐもの

世界の交換を提案したアクア。適当に返事を返してしまった俺。

ぬか喜びをさせてしまったアクアに一頻り謝罪した後、俺はその説明を求めた。アクアは頬を膨らみながら、それでも説明を始める。

「本来、肉体を抜けた魂はこの闇の世界に囚われます。冥界、と私たちは言っています」

「俺たちの世界では、天国とか地獄とか、または霊界と言うな」

「死後の世界という点では一緒でしょう。ここは浄化の地。再生の狭間。この世界に滞在する魂に対して『転生の儀』が行われる場所ですから」

アクアの説明はこうだ。

魂はこの闇の中で一時を過ごし、そして時が訪れると『番人』という者が来る。死神、という奴だろう。その番人は闇の中に漂う魂を見つけると、その魂の外殻をべりつと剥がしてしまうらしい。その外殻はその人の思い出とか記憶とか、そう言ったものらしく、それが消えるとまっさらな魂となって、これから生まれる命へと注がれる状態になるのだそうだ。

それが所謂『転生の儀』。

ではどうやって世界を取り替えるのか。

「ここからはある程度の希望的観測も混じりますよ」と付け加えてから、アクアは再び話し始めた。

「私とあなたが出会ったのは、偶然ではないと思うんです。何か、共通点があるはずです。私と、あなたの。重要なのはそこです。絆が私たちを結ぶなら、私はあなたの絆をたぐりあなたの世界へ、あなたは私の絆をたぐり私の世界へ歩いていける。私たちの世界で、こんな歌謡があるんです」

もしもあなたが死んだなら、こんなに悲しいことはない。

空に轟く叫びを上げて、冥界に添える唱としよう。

なにせ 冥界は真っ暗闇だ。

何も見えない。何も聞こえない。

そんな寂しさを、少しでも紛らわせて上げようよ。

なにせ、深い闇だけがあなたの友達。

冥界は、悲しい再生の場所だから。

だけど、だけど、もしもあなたが誰かと出会えたのなら、こんなに幸運なことはない。

魂の巡り合わせ。それはあなたと誰かが繋がっている証拠。

さあ、大いに語り合い尽くそう。時間は彼らが来るまでだ。

それまでに、あなたと誰かの絆を見つけられたなら。

灯火は灯るだろう。道は続く。

あなたと誰かが、忘却の悲劇に晒されることもなく。

あなたは道を歩いていける。

あなたは誰かの、誰かはあなたの灯火でしかないけれど。

それでも、あなたは自分の足で歩いていける。

だから僕たちは声を上げよう。

どうか、どうか。あなたが誰かに会いますように。

僕たちに出会えなくても、僕たちを忘れないで欲しいから。

だからさあ、僕らの声を冥界に届けよう。

「これは、亡くなられた人間に添える歌謡なんです。いつだったでしょうか。人間たちの集落を覗いた時に、この歌が聞こえました。それから、今でも覚えていくくらいに、何度も何度も繰り返したんです。不思議と、耳から離れなくて」

感慨深げに目を閉じるアクア。それに、俺は腕を組んで唸る、という気持ちでいた。気分ね。腕はないし。

「なんというか、まあ。俺たちのために作られた歌のようだ」「でしよう!？」

身を乗り出してくるアクア。うおう、美少女のドアップ。

睫長い、目が大きい、幾分興奮しているのか、頬も赤い。

うう、顔が近くてキスをしてしまいそうだ。そうなった場合、不可抗力だよな。うん。仕方がないよ。仕方がないよ。仕方がないよ。そんな俺の脳内議決も気にせずに、アクアは目を輝かして話し続ける。いい気なものだ。

「これって死んでも終わりじゃない、っていう慰めの歌だと思っていたんですよ、私。でも、これってもしかして、私たちがみたいな人が他にもいた証拠なんじゃないでしょうか。それで、生まれ変わった人がきつと、この歌を作ったんですよ。絶対、そうです」

さっき、もしかしてって言ったじゃん。

というツツコミは置いといて。ふむ。確かにそれは理に適ってい

るな。

絆というのは、俺とアクアの共通点。
彼らというのは、『番人』のこと。

忘却の悲劇は、自我の消滅。

そして『あなたは誰かの、誰かはあなたの灯火でしかないけれど』
というのは、世界の交換、か。

「そうだな」と俺は真剣に考えこんだ。今までにないほどに。
だが、見えてくるものはない。そもそもいきなり言われても、
という感じなのだが。さきほど出会ったばかりのアクア。そう簡単に
共通点など見つけられるものか。いや、共通点と考えるのも、あっ
ているかどうかわからない。『絆』だ。共通点というより、関連と
いったほうがいいんじゃないか。

「わかりましたか？ 私と、あなたの共通点」

そんな俺の熟慮がいったん途切れる。うーん、としばらく悩んで、
俺は正直に告げた。

「いや、さっぱり」

はあ、と落胆のため息を吐くアクア。おお。随分と態度がでかく
なったな。それが地か？

「じゃあ、お前はわかんのか。あ？」とききほどと同じようにアク
アの頭をどつきながら、ふと俺は何かひっかかりを覚えた。

何だ？ 今何か頭に閃いたんだが。

「や、やめてくださいよー」

「おい、ちょい黙れ」

どん、と強く頭突き。「あう」と悲鳴を上げて倒れこむアクア。うむ、デジャブのような光景だ。しかし、それに目もくれず、例えばそれが半裸体の美少女といえど目もくれず、俺は今までのアクアとの会話を一つずつ思い出していった。

俺と、アクアの絆。関連。

「あ、ああ。ああ！ ちょっと見てください！」

「だー、もう！ 今思い出せそうなんだから黙れ、って……」

言っただろ、という言葉は続かない。

闇の中で何かが蠢いた。見えない。けど、何かいる。絶対何かいる！

あれだ。ゴキブリが台所を横切り、物と物の隙間に逃げ込んだ。そんな雰囲気だ。息を潜めて闇の中を蠢く気配を、確かに感じる。鳥肌などという肌もない俺だが、背筋に冷たい何かが流れた気分であつた。

「あ、あれが番人か？」

「そ、そうです。多分。お、お願いですから、早く思い出してください！」

「わかつているっつーの！ ていうかお前も考えろよ！？」

何だ。俺とアクアの共通点。俺はアクアのような『美』がつくような容姿でもなかったし、こんなポケ子でもない。精霊なんてそんな大層なものでもなかった。そう。ただの大学生だったんだ。それが、何でこんな目に合わなければいかんだ！ ああ、腹が立つ！

何だ！？ やっぱ死んだのが悪いってか！？

じゃあ海なんて行かなきゃよかったよ！

と、また何かが過ぎる。

それは今度は通り過ぎることなく、俺の意識の上に急停止。

「……なあ、アクア」

「な、何ですか。思い出しました？」

「お前って、何の精霊だっけ？」

「こんなときに何です！？ ああ、手が出た。何か手が出てきた！
気持ち悪い！ 見てくださいよ！ 影から手が伸びてきますよ！」
「いいから答えろ！」

がつん、と三度目の頭突き。アクアは倒れこみながら、「水です
ー！」と叫んだ。

「そうだ、水だ！」

序章 転生の時(前書き)

ちよいとシリアスです

序章 転生の時

叫んだ。

声は闇の中を走り反響する。それと同時に、暗闇に亀裂が走った。亀裂の音、それは世界の崩壊の音。そして亀裂の合間からは、光が差し込んできた。光はそれがスポットライトのようになって道を作っている。

「見えた！」

「見えました！」

俺とアクアが抱き合って飛び上がる。ていうか、一方的に抱き付かれているのだがね。うむ。感触は心地良いよ。

番人は、いつの間にか消えていた。あれだ。多分、光に弱いんだ。ささっ、とどこか深い闇の中へと隠れていったのだろう。ゴキブリのように。

「やった。また、生きていけるんだ」

うう、と泣き出すアクア。

俺は、黙って抱きつかれたままだった。

別に感触を堪能しているわけではない。ないぞ。俺も、その気持ちかわかるのだ。自分という存在が消えないでいられる。それは、やはり肉体を失っていたとしても、生きているということにならないか。

そうだ。死んでない。まだ、俺は死んでいない。純粹な嬉しさがこみ上げる。

しかし、同時に一抹の寂しさも。

「……お別れですね」

溢れ出る涙を拭いながら、その俺の気持ちを代弁するように、アクアがそう呟いた。

「ああ」と俺は頷いた。

束の間だ。ほんの少しの間一緒に居ただけ。それでも、何か離れ難いものを俺はアクアに感じている。もちろん、こんな美少女そうそういないから、という気持ちがないわけではない。けれど、そんな外見なんて些細なことと思えるほどに、俺は『アクア』というただその人格を好きになっていた。

少しの間でも、情は移る。きっと、それが人間なんだろう。

じゃあ、精霊であるアクアはどう感じているのか。きつく抱きついてくる、アクアの心を感じる。

「私、ずっと人間になりたかったんですよ」

見上げようと思った。けど、止めた。なぜか今アクアの顔を見てはいけない気がしたから。

「だから、私は、あなたの世界で生きたいです。あなたの絆を手繰ってあげれば、私は人間に生まれ変われる。でも、私の世界に行けば、私はきつとまた精霊。それは決まっているんですよ」

「何で、わかるんだ？」

「わかるんです。精霊ですから。世界の理に近いんです。だから、このことも少し詳しかったでしょ」

「そういえばそうだな」と、相槌を打つ。

それから何と云えば分からなかった。分からなかったから、何も言わずに耳を澄ませることにした。アクアが求めているのは独白だ。答えじゃない。

アクアの顔を見ようとはやはり思わなかった。ただその声だけを聞く。

「ずっと羨ましかった。人間の村を覗きながら、あそこに加わりたかった。でも、村に下りたら、私は捕まりました。人間に。水の精霊は、人にとって貴重な『物』でしかなかったんです。井戸に沈められて、ただの水源として生きました。私の力が果てるまで」

「……」

「そんな世界に、あなたは生きたいですか？」

分かっていた。どこの世界だって、悲しみはある。ただ笑って生きていられる世界なんて、薄っぺらなものだろう。

「ねえ。あなたも、あなたの世界で生きましようよ。もしかしたら、また会えるかも。記憶を失わないなら、また会えるかもしれないじゃないですか」

「俺たちの世界だって、幸せだけがあるわけじゃない。むしろ、辛いことのほうが多かった」

目を閉じて思い出す、過去の出来事。いや、止めよう。ここで不幸の言い合いをしても仕方がない。

「俺は、やっぱりお前の世界に行くよ。アクアが生きてきた世界を見てみたい。やっぱり、魔法とか興味あるしな。それで、死んだらまたここで会おうぜ。そしたら、きっと本当の意味で死ぬことはない」

肉体が減びても、記憶がある限り。自我の消滅が死だというなら、ほら、やっぱり俺たちは死なないだろう。

「楽天家なんですね」

「ポジティブが俺の人生論だ」

「よくわからないけど、これからの私の生き方の参考にします」

手がそつと離れる。胸も。それに名残惜しさを感じながら（いや下心はないぞ）、俺は亀裂から差し込む光が導くその経路の上に、乗った。

アクアも、同じように。

「じゃあ、また会おうぜ」

「ええ。絶対に」

会ったときと同じ。涙で睫を濡らしながら、アクアは命一杯手を振った。だが生憎俺に振る手はない。だから代わりにピョンピョンと飛び跳ねる。

それをアクアは笑って、背を向け、駆け出した。

俺もアクアを見ないで、光の続く先を向く。

そう、俺も新たな門出だ。悲しむべきときでもない。振り返るべきときでもない。

進むべきときだ。

うおおー、と俺は光の先を走り抜けた。

気分はね。

実際、海面に漂う藻屑並みのスピードだったことは割愛させて頂く。

序章 転生の時（後書き）

長くなりました。序章なのに。本当は一話にまとめるつもりだったんですけど。

まだ別に連載しているのがあるんですけどね。ぽんぽんと別の小説のアイデアが浮かぶので、書いてしまいました。

更新は不定期で書いていきます。つまり気分です。書いたらすぐ載せるつもりですので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4656e/>

水月夜曲

2010年10月20日19時52分発行